



ニートとニード

いきなり私ごとで恐縮ですが、私には18歳の甥がいます。2年前に日本に一時帰国したときは、思春期真っ只中で暴れまくっていましたが、今回の一時帰国で久しぶりに会って、少しだけ成長した甥を見て嬉しくなっている叔母バカの自分がいました。

やりたいことが見つからず、どこにエネルギーを注げばよいかわからないという状況は、この年頃の若者にはきつと精神的ストレスなことでしょう。そんな若者は、「やりたいことがわからないから、とりあえず大学に進学しておこう」や、「何もやる気になれないから、家でゴロゴロしよう」など、人それぞれかと思えます。私の甥は後者なので、親が何を言ってもソファから動かない、どんなに励ましても叱っても、耳を貸そうとしない状態が何カ月も続きました。いわゆる“ニート”です。せめてバイトでもして、社会に少しでも出ていくことが、彼の好奇心と向上心を刺激するきっかけになるのではと願っても、家族の気持ちはなかなか伝わりませんでした。しかし、最近ようやく欲しい物ができたのか、少しずつですがカフェでバイトを始めるようになりました。一般的にバイトをすることはごく普通のことなのですが、この問題児を長年見てきた家族にとっては、大変大きな一歩でした(祝)。

私が彼の年頃のときは、アートやデザインに興味をもち始めた頃で、美術短大に進み、新しい仲間と環境、待ちに待った初めての一人暮らし、そして自分が楽しいと思えるアートを毎日勉強で

きることに嬉しくて仕方ありませんでした。それゆえ、彼が何に対しても興味を示さない、反応しないということが、なんとも理解し難いものです。自分は何が得意で、何に興味があるのか、それをする中で生き甲斐を感じる快感を、若いうちから見い出せた人は、とても恵まれているというわけではなく、しっかりとした意志をもって方向性もてる、つまり自分自身に自信もてる環境に恵まれていたということなのかもしれません。

現在、日本の照明業界の知り合いから、「人が全然足りない。(仕事) 続く人がなかなか入社してこない」と、よく耳にします。これは少子化だけの問題ではなく、「必要な場面で、必要なスキルとモチベーションを備えた人材を確保できない」という現状なのだそうです。人材が足りていないから、社員の労働量と時間に負担がかかるようになり、鬱になってしまう人や、辞めていってしまう人がたくさんいると。それらを聞いていて、今後はどうなってしまうのだろうと、とても不安な気持ちになります。何よりも、友人たちの心と体がいつまでもつのが心配です…。やる気と持続力がある若者を、今後どう集めるかが今後の大きな課題です。

日本の舞台照明業界は、興味のある人々や若者に向けて、照明デザインや機材などのさまざまな説明会や講習会が積極的に行われていて、とても活気的ななど、いつも感心して協会誌を読ませていただいています。英国は、こま

で頻繁に講習会を行っていませんし、自主的に機材会社にトレーニング講習を申し込まないと、

スキルアップの機会はなかなか得られません。あえて、個人で直接劇場に出向き、見習いをさせてもらえるか頼み込むケースも稀ではありません。日本もそうかもしれませんが、英国は毎年、演劇大学や専門学校の舞台照明コースから、照明の道を志したい大勢の若者が輩出されています。彼らにとって一番大事なものは、学校内の授業よりも、単位に含まれる「プロ現場での実践研修」、または卒業した後の研修経験です。どの学校を出ようとも、結局は現場での実践力と知識がなければ、誰も雇ってくれないので、はじめはみんなボランティアや、見習い研修から入ります。考えてみると、日本は講習会が多いのですが、英国は講習会は日本より少ないものの、研修生を受け入れる劇場が意外と多いです。報酬は発生したり、しなかったりと、劇場や団体によって異なります。

私の場合は、ロンドン大学の舞台照明デザイン科を卒業する前から、劇場での見習いやバイトをしていました(経済的にもきつかった)。技術面で一気に自分を成長させ、すぐに仕事に繋がれたのは、大学卒業後にTrinity Laban劇場(コンテンポラリーダンス劇場)で、舞台技術研修生を1年やらせていただいたお陰です。お金を少しいただきながら、実践で舞台照明、音響、映像、綱元を1から教えてくれる、素晴らしい研修内容でした。英国で舞台技術を1から学ばれたい方は、是非お勧めです! 無論、英語をある程度話せる必要はありますが。

甥の話から、英国の舞台研修の話に大分逸れてしまいましたが、つまりここで言いたいことは、「若者に、もっと好奇心をもっていろいろ挑戦してほしい」という、漠然とした願いであって、かなり受け身の青年が増えている近年、彼らの積極性を引き出すにはどのような環境が必要とされているのか、我々の世代に何ができるのかを考えたとき、彼らが興味をもって目指すものの先に、せめて私たちの生き生きとした姿を投影できればいいなと思います。



Trinity Laban劇場の2007~11年度研修生の集い



Laban研修時代(休憩中の息抜き風景)